



季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

〈第五十九号〉

小満 しょうまん
五月二十一日



大五輪

石碑に彫られた文章、碑文^{ひぶん}。堅い石にわざわざ刻み付けた碑文によって私たちは遙か昔の出来事をうかがい知ることができます。人々は輝かしい功績や偉大な人物、そして死者への供養など、その歴史を石に刻み続けてきました。しかし、何も刻まれていない無銘の石碑もあります。それらは長い歳月を経ると、真実よりも口伝^{くでん}が一人歩きをしてしまうものも少なくありません。

伊勢参りの精進落^{しょうじんお}としての花街として栄えた古市にも無銘の五輪塔があります。「大五輪^{おごごり}の五輪塔」といわれ、室町時代中期の宇治と山田の合戦による戦死者を弔うものと伝えられてきました。ところが昨年六月、日本仏教史が専門の山形大学松尾剛次^{けいじ}先生により、奈良の西大寺を再興した叡尊^{えいそん}という僧ゆかりのもので、鎌倉末期の建立と発表され、このたび市有形文化財に指定されました。

注目の五輪塔は、古市の集落の中にひっそりと建っていました。三メートル四十センチの高さもさることながら、どっしりと横に広がり、重量感を感じさせます。下から、方形、円形、三角形、半円形、上の尖った円形の石を積み上げ、地、水、火、風、空を表しています。松尾先生によると、このどっしりとした形がほかの叡尊の五輪塔と似ており、決め手となったとか。約七百年ぶりに判明した無銘の石碑は、実はその姿が語っていたのです。

敷地の一角には、お稲荷さんもまつられていました。大きなアブが突然に羽音を響かせ、五輪塔の回りを飛び始めました。それは不意の侵入者に警戒する、あたかも墓守のように見えました。

文 千種清美

